

シュリー・ハヌマーンの心の中の宝物

インドの古典的物語から

それは、アヨーデャーの王国のあらゆる市民が待ち望んでいた日でした。14年間の亡命と、10の頭を持つ魔王ラーヴァナとの激しい戦いを経て、ラーマ神とシーターは故郷に帰還しました。

彼らの到着は、盛大な歓喜をもって迎えられました。男や女や子どもたちは町の通りに列をなし、宮殿へと向かうラーマ神とシーターに花びらを浴びせ掛けました。

ラーマ神が戴冠される大ホールに、二人は席を並べて座りました。偉大な賢者ヴァシシュタがアヨーデャーの王冠を持ち、神に近づいていく様子を、皆が期待を持って見守りました。彼がラーマ神の頭上に王冠を載せると、ホール全体に「シュリー・ラムチャンドラ・キー・ジェイ！ シーター・マイヤ・キー・ジェイ！」「シュリー・ラム万歳！ 聖母シーター万歳！」という歓声が鳴り響きました。

ラーマ神は、シーターの方に振り向き、「シーター、これをあなたに」と、彼は言い、美しい真珠のネックレスを差し出しました。輝くばかりの笑みを浮かべ、シーターはお辞儀をして彼の贈り物を受け取りました。もう一度、ホール全体が歓喜に満ちた祝福の叫びで満たされました。

ラーマ神はほほ笑み、この幸せな光景に目を向けました。彼のそばには愛する兄弟たち——ラクシュマナ、バーラタ、シャトルグナと、勇敢な友ヴィビーシャナが

立っていました。彼の目の前には、彼の名のもとに非常に勇敢に戦った偉大なサル軍団が立っていました。ラーマ神は順々にサルを前に呼び、彼の感謝の意を込めて金と宝石の贈り物を贈りました。サルたちは、両方の手のひらを丸めてこのプラサードを受け取りました。

ついに、すべてのサルたちが贈り物を受け取りました。1匹を除いて。一連の儀式の間中、1匹のサルが手を合わせて畏敬の念を込めて頭を下げ、脇に控えめに立ち続けていました。

ラーマ神が献身的な僕(しもべ)を見詰めると、彼の目はきらめきました。

「ハヌマーン」と、彼は優しく言いました。

瞬く間に、ハヌマーンはラーマ神の足元にいました。「はい、ご主人様」と、彼は伺いました。

「お前が私にしてくれたすべての事に対して、どんな贈り物であれば私の感謝の気持ちを伝えることができるだろうか」と、ラーマ神は尋ねました。

「ご主人様、あなたは私のグルです」と、ハヌマーンはほほ笑みながら答えました。「あなた様にお仕えすることが、最大の贈り物です」

ラーマ神は、たくさんの愛情を込めてハヌマーンを見詰めていた彼の妻の方に振り向きしました。彼女は、手の中に真珠のネックレスを持ったままでした。ラーマ神は彼女が何を望んでいるのかがわかり、ほほ笑んでうなずきました。ネックレスを

身振りで示し、彼は言いました。「親愛なるシーター、英雄の資質を最も体現している者にそれを与えよう。勇敢でありながら謙虚で、揺るぎない献身で毅然(きぜん)とし、純粋な心、真の知恵、識別する力を持っている者に」

シーターはためらうことなくハヌマーンに近づくと、彼の首にネックレスを掛けました。「ハヌマーン」と、彼女は言いました。「どうぞ私たちの感謝の印として、この贈り物を受け取ってください」

ハヌマーンは、謙虚に頭を下げました。彼は片手にネックレスを集め、それをとても熱心に見始めました。そこに居た誰にもネックレスの見事な美しさ、一粒一粒の真珠が完璧なまでに滑らかで、月光のような光沢で輝いている様子を見ることができました。

ハヌマーンは一つの真珠を指でつまんで、それを光にかざし、何かを探しているように、ゆっくりと回しました。それからとても慎重に、真珠を彼の歯で挟み、かんで半分にしたのです！ ホール全体が驚きに包まれ、はっと息をのみました。真珠の内側を見て、何もないことを確認すると、ハヌマーンは二つのかけらを脇に置き、ネックレスの次の真珠に注意を向けました。ラーマ神は、ほほ笑みながら見ていました。ハヌマーンは無傷の真珠が無くなるまで、順々に真珠をかんで二つにしていきました。

「ハヌマーン！」と、ヴィビーシャナは叫びました。「何てことをしているのだ。シーター王妃が貴重な贈り物であなたをたたえたというのに、あなたはそれを台無しにしている。どうしたらそのようなことができるのか」

「あなたはわかりません、ヴィビーシャナ」と、彼は言いました。「私はラーマ神を探していたのです」。彼は、ヴィビーシャナが見えるようにネックレスの残骸を差し出しました。「どの真珠にもラーマ神の姿、名前、そして香りも見つけることができませんでした。その中に私の最愛の方がいないのなら、私にとって一体何の役に立つのでしょうか」

ヴィビーシャナは信じられない思いで、ゆっくりと首を振りました。「つまり、ラーマ神の名前や姿が入っていないから、このネックレスは役に立たないとあなたは思っているのか」

ハヌマーンはうなずきました。

「あなた自身の体についてはどうなのか。もし、あなたの体にラーマ神が入っていないなら、それも役に立たないのか」

この時、ハヌマーンの目は愛で輝きました。「見てください！」と、彼は叫びました。彼は胸に両手を置いて、尻込みすることさえなく大きく引き裂いたのです。「中を見て、あなた自身で見てください」

ハヌマーンの心臓の内側には、ラーマ神とシーターが座っていました。そしてハヌマーンの胸のすべての骨、すべての筋肉繊維にラーマ神の名が刻まれていました。

見ていた人たちは、畏敬の念に打たれ息をのみました。ラーマ神の名前は明らかに見えるだけでなく、はっきりと聞くこともできました。神聖な名前——ラーマ、

ラーマ、ラーマ——が、ハヌマーンのすべての部位から鳴り響きました。それは宮殿のホールを通過して天界で共鳴し、世界をその甘美さで満たしました。

愛と慈悲の心に満ちて、ラーマ神はハヌマーンに近づきました。その両手でハヌマーンの胸を閉じ、抱擁で彼を包み込んで、傷を完全に癒やしました。

「ハヌマーン」と、彼は言いました。「お前が望むものは何であれ、私のすべての心を込めて、お前のためになさよう」

ハヌマーンは、ためらうことさえしませんでした。「私の願いは常にあなたに献身することです、ご主人様。私があなただけを愛し、私の存在のすべてをもってあなたにお仕えますように。今も、そして永遠に」

ラーマ神は、うなずきました。「ではそうするがよい、親愛なるハヌマーン」

ハヌマーンの顔に、朝日のように輝く満面の笑みが広がりました。彼は感謝を込めて頭を下げました。今では誰もが、ハヌマーンの最愛のラーマ神への献身の本当の深さを理解しました。ハヌマーンの一点集中の奉仕を通じて、神は彼の心の中に住み着き、彼の全存在に浸透していたのです。